

江戸に出た地方蘭学者と地域の交流

——小関三英の書簡から見える庄内地域——

矢森 小映子

はじめに

天明七年（一七八七）に庄内藩鶴岡に生れた、小関三英という蘭学者がいる。三英の史料はほとんど焼失しており、同じ蚕社の獄の犠牲者である渡辺崋山や高野長英に比べて伝記・研究は非常に少ない。また鶴岡での在地医療に失敗し、仙台・江戸に出て活動したため、一部の郷土史家によるすぐれた研究はあるものの、現在では鶴岡の人々にもあまり知られていないという。

筆者はこれまで渡辺崋山を主な研究対象としてきたが、三英が崋山の洋学研究に果たした役割の大きさを知り、その人物像に興味をもつようになった。そこで三英

の史料だけでなく、庄内地域における周辺史料も調査し、同時代の社会・人々の中で三英が如何なる存在であったのか分析してきた。

三英の残した数少ない史料の一つが、庄内地域にいる兄仁一郎に宛てた一連の書簡である。これらの書簡は、従来三英の伝記史料として用いられてきたが、一方で庄内地域における文化や経済、さらにその活動を生き生きと伝えてくれる史料でもある。本稿では、これらの書簡から見える庄内地域のありようを紹介するとともに、江戸に出た地方蘭学者と地域の関係について考察してみた。

(1) 研究史

①小関三英研究史

小関三英に関する研究は、郷土史家による熱心な研究活動によって支えられてきた。その成果は大正一三年に酒田新聞に掲載された佐藤古夢氏の『小関三英小伝』、阿部正己氏による草稿『小関三英伝』にまとめられている。これらは現在に至るまで、「三英伝」として、もつともまとまった研究⁽¹⁾であり、一九七〇年に杉本つとむ氏によって活字化された⁽²⁾。両者とも原稿完成日時が古いために訂正補筆すべき点も少なくないが、今なお研究者にとつて裨益するところは大きい。

昭和一三年に、三英が兄仁一郎に宛てた多数の書簡が発見され、山川章太郎氏によつて全文が紹介された⁽³⁾。これが小関三英研究を飛躍的に進めることになる。三英がシーボルトの弟子ではなく、長崎遊学もしていなかったなど、従来多くの誤伝が訂正されることとなった。

歴史学研究における三英は、当初政治意識の低い、内職的動機による翻訳技術者として位置付けられてきた。例えば洋学史研究者の佐藤昌介氏は、三英が翻訳で崋山を助けたのも「多分に内職的動機によるもの」であり、「学

究的立場に終始」していたとし、大塩事件に関する三英の書簡には「政治意識の低さが明白に示されている」と評価している⁽⁴⁾。しかし近年では岩下哲典氏や岩田高明氏の研究により、三英の政治意識に対する再評価が進んでいる⁽⁵⁾。ただしそれらの研究とは、近世におけるナポレオン研究史や西洋教育情報受容史における三英の画期性を評価するという、いわば時間軸の中での意義をはかるものであり、同時代の社会・学問といった「横軸」（空間軸）の中に三英をどう位置付けるかという問題は残されている。

ところで、同じ蚕社の獄の犠牲者である崋山や長英に比べ、三英の研究はなぜ進まなかったのだろうか。

第一の理由としては、先に述べたような史料の制約が大きい。三英は天保一〇年（一八三九）五月一七日、崋山逮捕の報を聞き、累が及ぶのを恐れて自殺したが、その前に全ての書類を焼いている。生家小関家においても、小関家の勤書や、三英の遺物である二〇〇有余冊の翻訳書や書簡を所蔵していたが、明治四三年三月、火災で全て焼失してしまつたという⁽⁶⁾。

第二に、郷土庄内の人々の関心の薄さも挙げられる⁽⁷⁾。

その背景として、①三英が庄内を離れて活躍し、庄内とは疎遠であったこと、②徂徠学主流の庄内藩にとつて蘭学は異端であったこと⁸⁾、③蛮社の獄関係者のため、左幕派の庄内藩としては関わりたくなかったことなどが指摘されている。

このように郷土においてすら「忘れられた人」⁹⁾となつていく中で、小関三英の生家および庄内地域に対するイメージは、郷土外の人々から次のような言葉で語られるようになる。以下に掲げるのは、半谷二郎氏による評伝の一節である。半谷氏は、天明四年に鶴岡を旅した菅江真澄の日記を引用した後に、次のように述べている。

この三年後の天明七年（一七八七）六月十一日、このような寒々とした鶴岡のまちに、荘内酒井氏の足軽組組外れという軽輩の子として、小関三英は生まれた。

こんな環境の中で、貧乏な地方下級官吏の、二男として生まれ、しかも幼くして足に大きな火傷を負い、終生びっこであった三英が、『キリスト伝』を読み、リンデンの『ナポレオン』から『フランス大革命』を読みとり、日本人としてはじめて『フレイ

ヘイド」（自由）と『ゲーマーネベスト』（共和制民主主義）を肌で理解し、友人（親友）にも語り、化政・天保の時代の中で思想にまで止揚して、文字どおり必死に、ひたすら生きた¹⁰⁾。（傍線筆者、以下同）

半谷『小関三英』は、三英の生涯や人間像を鮮やかに描き出し、近世における思想的意義を論じたすぐれた評伝である。しかし小関三英の書簡から見える庄内地域および生家の姿は、このような寒々しいイメージとは異なるものである。本稿ではそのありようを詳しく紹介したい。

② 「地域蘭学」研究との関わりから

小関三英と庄内地域の関係を考察することは、「地域蘭学」研究においても意義が大きい。

蘭学に関する研究史は、明治以来の分厚い蓄積があるが、「地域」の視点から捉える研究は比較的新しいものである。なぜなら従来主流とされてきたのは、幕府や特定の諸藩、そして前野良沢・杉田玄白といった頂点的蘭学者たちの研究であった。そこには、西洋伝来の蘭学が、農村などに入るのはないというイメージが存在している。

例えば昭和一〇年代以降活発に展開された洋学論争では、洋学の性格をめぐり、封建制補強者説と封建制批判者説が対立した。しかし両者とも、幕末期の洋学については、民生的な医学から封建補強的な軍事科学へ、担い手を医者から武士へと捉える点で一致していた。⁽¹¹⁾

このような研究動向に対し、一九七〇年頃から、田崎哲郎氏が三河をフィールドに、幕末における在村蘭方医の活動事例を発掘し「在村の蘭学」という新たな研究視角を提示した。⁽¹²⁾以後、信濃をはじめ各地域における在村蘭学の事例が次々と明らかにされ、その実態の解明が進んだ。幕末期、庶民的洋学がより広く地域に浸透し、武士による軍事科学化の増大とあいまって拡大していったことは、現在の研究状況においてほぼ共有されていると言えよう。⁽¹³⁾

なお田崎哲郎氏の提起した「在村の蘭学」とは、村だけでなく町をも含む概念であり、現在では「地域の蘭学」という言葉が一般的になっている。そして青木歳幸氏が「地域蘭学とは、医学を主流として、地方の村や町の庶民生活にはいりこんでいた在地の蘭学をいう。地域とはある程度地縁的に一体化したまとまりのある庶民の直接

的生活領域ととらえておく。」⁽¹⁴⁾と定義したように、その中心は医学であったと捉えられている。ただし地域における知識人としての役割など、医療以外の側面で与えた影響についても、既に多くの事例が紹介されている。⁽¹⁵⁾

また地域蘭学研究においては、中央と地方の関わりが重要なテーマとなっている。この「中央」「地方」という語については、青木歳幸氏により「蘭学における中央とは、西洋学術の導入および研究・修学における中心地、地方はそれ以外の地とおおよその理解をしておく」という定義がなされている。⁽¹⁶⁾当初研究の対象となったのは、中央の蘭学塾で学んだ後に故郷に戻り、町・村医として地域における蘭学の普及に寄与した在村蘭方医たちであったが、研究が進むにつれ、知識や情報・書物・物など、中央と地方の間の様々な交流の事例が報告されるようになった。⁽¹⁷⁾今後はこのような事例を全国的に調査・蓄積し、その多様なあり方を具体的に検討していく必要がある。このように、地域蘭学研究における重要なテーマである、①地方蘭学者が地域に果たした役割や、②地域と「中央」との関係を考えるうえで、小関三英の事例はとても興味深い。なぜなら、三英は鶴岡での在地医療に失敗し

て江戸に出た蘭学者であるからだ。医学を通じて地域に根付くことができなかつた地方蘭学者・小関三英は、その後地域とどのような関係を築いていったのだろうか。

(2) 基本事項——人物と史料について——

小関三英は天明七年（一七八七）鶴岡に生れた。名は好義、最初三栄という。小関家は寛文二年（一六六二）、五代信勝の頃から庄内藩酒井氏に代々組外として仕えていた。三英の父は九代知義（通称弥五兵衛）で三英は二男である。

庄内藩⁽¹⁸⁾の武士は「家中」と「給人」に分けられ、家中は手廻以上の侍身分、給人は徒以下の下級武士を指す。役職上でも各々は従属関係にあり、身分的に厳格に區別されていた。「組外」は給人のうち、足軽組組外であつて、三二組ある足軽組に編入されず、通常郡代⁽¹⁹⁾支配に属して会計のことを取り扱つた。給人は概して家中に比べ薄給であつたので、生活は非常に苦しく内職で補つていた。しかしその中でも組外は少し事情が違つていた。鶴岡藩物頭として戊辰の役にも戦つた黒谷時敏が、旧庄内藩の様子を書き綴つた『くだくだ草』（其十一）⁽²⁰⁾には、組外

について次のような記述がある。

又御組外れは御郡代の支配なれば貧窮なる者をは錢金の取れる勤方へさし向け三年代りにて段々よき方へ繰上る習へにて役付にもなりぬれば其役所の金を数多取あつかへり、鍋のはたに居るものは肴をたらふく喰ふと云ふ譬の如く金が自由になるものと見へて先づ納方大津方調役などをはしめしかるべき役働の者共が平常の暮しは七八百石取る土にも勝れりなと云へる事なれば年頭には種々の酒肴をととのへ置て客をもてなしぬ。〔後略〕

組外は郡代や代官の下で藩の会計事務を一手に引受けていた。「鍋のはたに居るものは肴をたらふく喰ふ」という例えのように、役得も多かつたため、「七八百石取る土」にも勝る暮らしぶりの者もいたという。比較的裕福で、小作地を持つ者もあつた。藩校致道館への入学は許されていながつたが、漢学や謡曲・軍談の寄合や剣術の稽古をして、それなりに教養を身につけていたという⁽²¹⁾。小関家は決して「貧乏な地方下級官吏」の家ではなく、身分は低いが比較的裕福な家であつた点は、三英のその後半の人生を考えるうえでも重要な点である。

三英は幼い頃に足に火傷を負ったため足が不自由で、生涯を通じて度々足痛に悩まされることになる。文化一年（一八一四）に江戸に上り漢学修業をしたとされる。⁽²²⁾

またこの頃蘭方医吉田長淑に学んだという。⁽²³⁾ 文政四年（一八二二）頃鶴岡に帰り医業を開くが全く流行らなかつた。同時代庄内の国学者・歌人として著名な、池田玄斎の『弘采録』一二四冊でも、三英を「蘭学に至ては妙を得たるもの也。治療には甚拙く」と評している。⁽²⁴⁾

文政六年、佐々木中沢の推挙で仙台藩医学校の教官に着任するが、文政八年これを辞して一度郷里に戻り母の看病にあたる。この急な仙台退去の背景には、仙台藩医学校内部における漢方医と蘭方医の対立があつたという。⁽²⁵⁾

文政一〇年に再び江戸へ出て最初湊長安方へ、次に桂川甫賢方へ寄宿する。天保二年（一八三一）に渡辺崋山に会おう。天保三年に岸和田藩藩医に仕官し、天保六年には天文方の蛮書和解御用を仰せ付けられる。天保一〇年、蛮社の獄で累が及ぶのを恐れ自殺した。

三英は「好んで西洋の歴史を修む」⁽²⁶⁾とあるように、西洋の医学だけでなく歴史・社会制度や思想にも広く関心を寄せた。医学分野における業績としては、文政九年

にドイツのコンスブルックG. W. Consburchの内科書の蘭訳書を訳して『泰西内科集成』とし、天保三年にその提要を『西医原病略』と題して刊行している。ほか世界地理の分野では『新撰地誌』⁽²⁷⁾、歴史分野では『那波列翁伝初編』⁽²⁸⁾、西洋教育情報では『鑄人書』⁽²⁹⁾などの訳書がある。

三英の生涯を知るための基礎史料となるのは、三英が庄内の兄仁一郎に宛てた書簡である。鶴岡の旧士族町野家に伝わったもので、一九三八年頃古本屋の手に入ったという。全部で六四通あつたが、ここで二つに分かれ、鶴岡の荒川比子一氏と、仙台の山川章太郎氏の手に渡る。山川氏は両者を合わせて調査・翻刻した⁽³⁰⁾。のち山川氏所蔵の書簡四七通は鶴岡市立図書館へ寄贈される。鶴岡荒川氏の書簡は現在杏雨書屋に所蔵されている⁽³¹⁾。これらを含めた三英の書簡群の全容については【表2 小関三英書簡】にまとめた。

なお、兄仁一郎は天明三年、小関知義の長男として鶴岡に生れている。名は順義、通称友之輔、のち仁一郎と改名する。小関家は代々組外であつたが、天保七年御精勤に付き紋付上下を拝領し、その後櫛引通本郷組大庄屋

を命ぜられ、俸米二五俵を給された。

庄内藩は行政上、川北（最上川以北）を三郷、川南を五通に分け、さらにそれぞれを数組に区画している。各組は数ヶ村〜十数ヶ村の村々から成り立っていた。農村支配においては、郡代の下に郡奉行⁽³²⁾・代官⁽³³⁾（文化一二年より大庄屋は代官一本扱い）があり、その下に大肝煎（後に大庄屋と改称）があつた。大庄屋の下に村方役人として肝煎―組頭（後に添役）―長人百姓があつた。大庄屋は農村支配の要として各組に一人ずつ置かれる。初期の大肝煎には在地の有力者懐柔のため土豪や郷侍が任じられたが、次第に知行・格式が下げられ、転勤も行なわれる民政吏に変容していった。大庄屋の職務はその組の地域的特色によって一律ではないが、基本的には年貢徴収・検見・普請・治安・公事・農事・人別改めなどであつた。

仁一郎の二男高比子（厳比子・厳彦）は、天保八年より三英の養子となり江戸に遊学している。この次男が、『合衆国小誌』（安政二刊）『山砲略説』（嘉永七序、安政二刊）の訳者として有名な、幕末の洋学者小関高彦である。

仁一郎も江戸に居住していた時期があつたらしい。三

英の子孫である小関重孝氏より阿部正己氏に宛てられた「調査書」によれば、「祖父仁一郎八天保年間、故三英存生中約一ヶ年程藩命ニヨリ江戸詰トナリシコトアル趣キニシテ、其当時用務ノ傍ラ鎗述⁽³⁴⁾ヲ研究、能ク之ヲ極メ勤番明ケテ帰郷、藩ノ子弟ニ鎗述⁽³⁴⁾ヲ教授方命セラレシモ事故アリ辞退セリ。其他不詳⁽³⁴⁾」とある。天保年間における三英書簡は、天保元年から同三年二月二日まで欠落しており、仁一郎がこの時期江戸詰であつたと考えるならば、書簡欠落の説明がつく。

最後に本稿で使用する史料について説明しておきたい。既にとりあげたが、同時代の庄内人、池田玄齋の随筆『弘采録』一三九冊、『病間雑抄』七四冊⁽³⁵⁾がある。玄齋は鶴岡の国学者で歌人であるが、趣味としての铸物も有名である。安永四年（一七七五）、庄内藩士池田祐平の長男として生れたが、三〇歳のときに聾となり、家督を弟に譲って専ら文事に親しんだ。はじめ漢学を修めたが、のち杉山廉らに師事して歌人となった。庄内に来訪した諸国の雅客と交わり、交遊は広がったという。そして同じ鶴岡出身の小関三英とも交際があつた。『弘采録』『病間雑抄』には庄内における様々な情

報が書かれている。その中には三英の噂も見られるが誤りも多い。例えば『弘采録』七五には、以下のよう
な記述が見える。

小関貞橘〔三英〕は吾州の産也。蘭学に長し一意翻譯を専務とせしが去々年東都に出て桂川家の世話になり蘭書翻釈をして餉口も相応に出来ぬるよしを聞けり。しかるに去年岡部美濃守殿に被召抱ししらせあり。①七両に五人扶持か。なれとも格式は用人席也なとゝいへり。今茲に至り公義にても高橋作左衛門馬場喜十郎一件後蘭学天文方御指問にて右貞橘事岡部侯より御もらい有りて天文台懸り并に蘭学兼帯被仰付しといへり。弥の実説なれば案外の立身と云へし。②貞橘は予か方へも折々来り。萬春龍溪なども懇意せる男なり。見分よりして蘭人のことく見ゆれば伽毘丹と綽号せし事なりき。

同郷の蘭学者、三英の経歴を紹介しているが、岸和田藩岡部侯に仕えた俸禄が①「七両に五人扶持」というのは「五両七人扶持」の誤りである。しかし②「予か方へも折々来り」とあるように、萬春（大山の田中政均。和漢洋を兼ねた博学多識の学者）龍溪（氏家剛太夫。致道

館の司書で画に長じていた⁽³⁶⁾ら同郷の士と共に実際に交流していた人物の記録として、三英と庄内地域のつながりを伝える貴重な史料である。三英の外見がオランダ人に似ていたために「かびたん」とあだ名をつけられていたエピソードなど、公式の記録には出てこないような生き生きとした三英像が描かれている。

池田玄斎のこれらの史料や、郷土史家の阿部正己氏が小関家の子孫に調査した記録⁽³⁷⁾など、地域の周辺史料も活用しながら、江戸の三英と地域の間様々なつながりを考察してみたい。

一、書物によるつながり

三英の書簡を読むと、江戸の三英と庄内の仁一郎との間で盛んに物のやりとりがあったことがわかる。例えば仁一郎からは、三英の好物であったという特産品の鮭・滑茸や、飢饉時には干蕨などが送られた。江戸の三英からは書物・学習筆・かんざしなどが送られている。本稿ではこのうち、書物に注目してみたい。

(1) 仁一郎からの注文

まず掲げるのは、天保五年九月十日付の小関仁一郎宛三英書簡〔表2〕における番号三五、以下書簡番号のみ記載〕である。同日付の書簡は二通あり、これは第一白である。長男千代松と次男高比子を江戸に遊学させたい仁一郎が三英に世話を依頼してきたので、これに対する三英の拒絶が書簡の大部分を占めている。その中に、次のような一節がある。

成瀬氏より之注文書被御遣、委細承知仕候。遁花秘訣と歟申候ハ遂聞覚不申候。猶又問合可申候。西音發微と申物ハ詰らなき本二御座候。右ハ藏板二而、其板主当春之火事二類焼致候間、嘸板木も焼失候半と存候。久しき已前二摺出申候間、只今ハ摺置之本相竭候茂難斗存候。何れ聞合、有之候ハ、相求差下可申候。西医方鑑ハ京都之藏板二御座候。未た天文台伺相済不申と存候間、東都書林二売出候や否相知不申候。是又穿鑿仕、有之候ハ、相求、差下候様可仕候。

「成瀬氏」より注文を受けた三種の蘭学書について回答している。『遁花秘訣』は、ロシア船に捕えられた中川

五郎治が持ち帰った牛痘書を、文政三年にオランダ通詞である馬場佐十郎が翻訳したものである。利光仙庵により『魯西亜牛痘全書』として出版されたのが嘉永三年であるから、ここで言及されているのは写本であろう。三英は聞き覚えがないと回答している。小関三英が文化年間から文政初期に馬場佐十郎に蘭学を習っていたとする説もあるが、杉本つとむ氏はこの書簡の書きぶりから否定している。⁽³⁸⁾

『西音發微』は、大槻玄沢の長子大槻玄幹の著とされる。⁽³⁹⁾ 文政九年に出版された。オランダ発音に和音唐音を対照させたもので、三英は「詰らなき本」と回答している。

『西医方鑑』は京都の蘭学者藤林紀元(普山)訳輯『西医方選』(十巻)と考えられる。多くの蘭書から適切な治療法一五〇〇方をとり、病名の下に治方を書いたもので、文政一一年に京都・江戸・尾州より共同刊行された。玉川堂藏版である。⁽⁴⁰⁾ 興味深いのは、「天文台伺」が済んでいないと書いていることである。文政四年に発令された洋学書出版取締令では、曆書・天文書・阿蘭陀訳物等の出版は、江戸町年寄経由で町奉行所に届け出て、同所

の許可を得ることとなっていた。これは天保の改革により、天保一三年に改められる。町奉行所に草稿本を提出し、曆書・天文書・洋書の翻訳書は天文方に、医学書は医学館に回送し、各機関が検討のうえで出版の許可・不許可を決めることとなった。⁴¹⁾ 本書簡は天保五年であり、また京都蔵版の医学書であるが、当時天文台の許可が必要だったのだろうか。

この成瀬氏からの注文書籍については、翌天保六年正月五日の仁一郎宛書簡(三八)でも新たな情報が伝えられている。

成瀬氏注文之書物、昨年申上候直段二而、不苦候ハ
、何時ニても調差下可申候間、其段被仰通可被下
候。余ニ高直其上宜しき物ニも無御座候。東都ニて
ハ一向用不申候間、旁以見合申候。西音發微茂板ハ
焼失候へ共、いつ方ニハ板本可有之候間、春中ニ探
索相求差下可申候。

昨年知らせた値段でよければすぐに送ることができるが、あまりに高値のうえ良いものでもないの、見合わせているようだ。『西音發微』は版木が焼失しているが、どこかに板本があるだろうから春中に探して送ろうと書

いている。

「成瀬氏」の詳細は不明だが、おそらく庄内で仁一郎と関係のあった人物であろう。仁一郎はこの成瀬氏のために、江戸の三英に書物の問い合わせ・注文をするなど、その仲介役をつとめていたことが分かる。

また仁一郎自身が書物を注文することもあった。以下に掲げるのは天保六年三月十日付の仁一郎宛三英書簡(四二)である。

然は詩経註疏、左傳註疏之義、委細奉申上候。唐本
はすべて有る事も有之、又無事も有之、和板之様ニ
ハ參不申候。其故ハ是迄所持致候人、払度と申時ハ、
其本有之候へ共、日本ニて出来候ものニ無之候間、
只今求たしと申候而も、其本無之候。乍去長き内ニ
心かけ候得は、不意と賣に出候事有之候間敷ものニ
も無之候間、相心かけ可申候。夫故直段も極り不申
候。

仁一郎による『詩経註疏』『左傳註疏』の注文を受け、「唐本」は、「和板」つまり「日本」で出来たものではないために入手が難しいことを訴えている。ただし「不意」に売りに出ることもないわけではないので、気長に心が

けておくとしている。そのため値段も回答できなかつたようだ。

(2) 返札としての書物

書物をめぐるやりとりは、仁一郎からの問い合わせや注文によってなされるものだけではなかつた。天保七八年には、仁一郎からの病氣見舞として金一両を受け取つた三英が、返札として書物の送付を計画している。その経緯を四通の書簡から追つてみよう。

①天保七年九月七日 小関仁一郎宛三英書簡(五五)

一・ 嚴彦来春為御登被成候様奉存候。(中略) 康熙字典並二三国志唐本之義、委細承知仕候。

書簡の前半は省略したが、仁一郎の役宅移転を祝すとともに、天保七年の全国的な大冷害と飢饉の様相を報じている。その中でも「御地」は「結構之事」としている。一度は断つていた嚴彦(仁一郎次男)の江戸遊学も決定したようであるが、このような双方の事情を鑑みて来春に延期している。そして仁一郎からの『康熙字典』『三国志唐本』の注文を承知している。

②天保七年十一月二十八日 小関仁一郎宛三英書簡(五七)

十月十九日、並二十廿八日之尊書、先達而相届、金壹兩為御遣被成下、嚙御多用二而被為在處、重々奉恐入候。決而左様之御心配、被成下及不申候。返しく茂奉恐入候。右返納仕候茂、却而奉恐入候間、何ぞ可然書籍相調、後便差下可申候。

三英はこの前月病氣をしていたらしい。この書簡ではその回復を知らせている。また先月十九日、二八日の書簡を受取り、病氣見舞いの金一両に恐縮している。返納するのしかえつて恐縮なので、何か然るべき書籍を購入して送りたいと申し出ている。

③天保八年七月一六日 小関仁一郎・民之輔宛三英書簡(六一)

此間康熙字典恰好之者有之、代金貳兩二て為調申候。高比子為御登二付てハ、嚙御地二而茂、莫大之御物入被成下候半と奉恐入候。書籍等之事ハ、拙子差略可致義二御座候處、此節種々之事有之、甚私方差支候仕合二て、先高比子貯金之内より為調申候。当年相濟候得は、又工夫も有之候。(中略)

一・ 十八史略、元明史略差下申度調置候得共、高比子二相談仕候處、御地二而綱鑑補も有之候由二御座

候間、不珍物二御座候間、先見合申候。此頃歴史物二而、何ぞ珍敷物差下可申候間、左様御思召可成下候。

この頃既に高比子は江戸に到着して学問を始めており、省略した書簡の前半には、先月古賀侗庵に入門したことが報じられている。注文を受けていた『康熙字典』は「恰好之者」があつたので二兩で購入し、高比子の貯金から支払つたという。仁一郎は、高比子の学問用に注文していたのであろうか。

さらに先の見舞金の返礼のつもりか、「歴史物」の書物の送付を計画している。『十八史略』『元明史略』を送付するつもりで用意していたのだが、高比子に相談したところ、既にそちらに『綱鑑補』⁽⁴²⁾があるそうなので、珍しいものではないだろうと見合わせた。「歴史物」で何か珍しいものを送りたいと述べている。「御地」の蔵書を確認しながら、三英は「此頃歴史物二而、何ぞ珍敷物」を探していた。

④天保八年十月十二日 小関仁一郎・民之輔宛三英書簡

(六一)

先達而綱鑑學要と申略史物、宮嶋下候節、差下申候。

嘸御請取被成下候由存候。右は略史物二而八、当時評判之書二御座候。

ようやく仁一郎に送る書物が決まった。『綱鑑學要』⁽⁴³⁾という略史物を宮嶋という人物に託して送つたという。

「当時評判之書二御座候」という文章からは、この書物に対する三英の自信のほどがうかがえる。「歴史物」の書物は、仁一郎が何より喜んでくれる贈り物だと三英は考えていたのであろう。

川村肇氏は、在村知識人に共通して歴史的関心が高かつたことを指摘している。そもそも儒学の基本テキストには、『書経』『春秋』など歴史書の占める位置が大きく、儒学を学ぶことは中国古代の支配の歴史を学ぶことでもある。しかしその学び方には多様性があり、在村知識人たちは歴史学習を通じて政治的関心が喚起されていったという⁽⁴⁴⁾。仁一郎がこれらの歴史物をどのように読んでいたのかは、今後検討が必要であらう。

③三英からの依頼

——鶴岡での出版列名人募集——

文政一一年三月二四日付の三英書簡(一一)には、同

じ出羽国出身の蝦夷地探検家、最上徳内に関する次のような記述がみえる。

此間時々最上徳内二面会仕候。当年七十四才二相成候由二御座候へ共、中々壯者二相勝申候。学文于今精勵被致候。右徳内、今度論語之注解出来二付出版被致候二付、列名之者四十人斗相加へ候へ共、出羽国之者は只兩人ならては無之候間、何卒庄内二同意之人有之候ハ、相加へ申度候間、私媒致呉候様申聞候。尤右名前相加へ候二、金銭之相かゝり候二も無之候間、御地同意之仁有之候ハ、右之段御通達被下度存候。弥以名前加へ度と申仁有之候ハ、其実名と字号^{アザナ}ヲ書付、ソレ二徳内へ之礼之書状、差添被遣候而よろしく御座候。右本出版之上は、忝本ツ、列名之人二相配り候間、其節は代金差出不申候而ハ相成不申候。外二物之入候義も無御座候間、もし同意之仁も有之候ハ、早速被仰下度候。右板は当秋迄二成就之由二御座候。右之段最上生此間相願申聞候間申上候。以上

三英が時々面会したという最上徳内は、当年七十四歳であった。しかし「中々壯者二相勝」り、「学文于今精勵被

致候」人物であると三英は賞賛している。その徳内が今度「論語之注解」を出版することになった。だが「列名之者四十人斗」のうち、同郷の出羽国の者が二人しかいないため、庄内に同意の人があればぜひ加えたいと、三英に「媒」すなわち仲立ちを頼んだのである。早速三英は庄内の兄・仁一郎に周旋を依頼し、これには金銭はかからないので、「御地」に同意の人がいればこのことを伝えてほしいこと、もし名前を加えたい者がいれば、その実名と字号を書付け、徳内への礼状を添えて送るようにと書き送っている。

徳内の「論語之注解」とは、『論語纂訓』を指す。徳内は文化元年はじめに着手し、文政元年六月に完稿したという。書名は『論語』を生活の常法とする教訓という意味で、在来の儒学者の単なる訓詁注釈の踏襲ではない彼独自の方法で正しい訓読・釈義を目指した。内容は巻之首一卷、論語全二〇巻、助字解一卷、孔子系譜・孔子年表・弟子年表など合わせて一巻の、合計二三巻である。文政九年には附録として『詩文押韻策』一巻を著す。全二四巻だが、出資の関係か『首巻』『詩文押韻策』のみしか出版されなかった。⁽⁴⁵⁾

なお、このあたりの事情を伝える次のような資料がある。文政一二年に徳内より野辺地の島谷家（徳内妻ふでの実家）当主秀次郎に発した書簡である。⁽⁴⁰⁾

一・論語著作二十四卷、彙訓と号し、京都三条殿へ追て入御覧有之候所、当正月右御序被下置、此節彫刻申付有之候に付、出来次第差遣候様可仕、右に付序の次は参閱諸先生、修校諸先生都合四十人計も書載仕候積に御座候。

参閱諸先生

寺島俊平先生 九条殿祭主

村上応介先生 三条殿侍講

尾州・紀州・水戸儒

其外京・大坂・西国・北国・長崎等に御座候修校

諸先生

当時諸国之学友其外門人、此内安田子行⁽⁴¹⁾も書入候心得に御座候。

京都の三条公修に序文を願ひ出て下賜されたこと、四名の参閱・修校の学者名を書き入れるつもりであると記されている。この点は、三英の言う「列名之者四十人斗」と一致している。

都立中央図書館青淵文庫所蔵の版本『論語彙訓巻之首』を確認したところ、序文・参閱修校者等の記載はなく、見返しには「全部二十四卷 最上徳内先生著 論語彙訓巻之首 塾中初鑄 彫刻鷹金屋伊兵衛」（傍線報告者）とあった。奥附はなく刊年も不明である。⁽⁴⁸⁾

杉仁氏は校者について、「実質校訂者」「出版校者」「版費校者」に類型化している。⁽⁴⁹⁾ 徳内の言う「参閱諸先生」「修校諸先生」「諸国之学友其外門人」らが実際にどのような役割を担っていたかは、徳内書簡からはわからない。小関三英の書簡からわかるのは、鶴岡で募集された「列名之人」とは、出版されれば一本ずつ配られるのでその際の代金は必要になるが、それ以上の費用負担はかからないこと、ただし申込む際に徳内に「礼之状」を出す必要があるということくらいである。実際には「塾中初鑄」版以外の版本は現在確認できておらず、三英・仁一郎を通じたこの募集に鶴岡からのかなりの希望者が集まったのかは不明である。

(4) ナボレオン関係蘭書の翻訳

三英が江戸から送った書物は、庄内地域でどのように

利用されたのだろうか。文政一二年三月朔日付の三英書簡(一七)には、その一端を伝えるような記述がある。

一、泰西近年之軍記も、押付和解出来仕候間、当月末頃迄二は差下、入御覧可申存候。別冊壹本差上申候。是は先年入貢之蘭人より、高橋咄ヲ承り候俟、記録致候もの二御座候。少々伝聞之誤も可有之御座候へ共、先是二而大略は相知申候間、此度差上申候。乍去此本決して、御他見は御無用に御座候。

この史料は、先行研究において、ナポレオン伝の翻訳状況や翻訳時期を解明する手がかりとして注目されてきた。江戸時代におけるナポレオン情報の流入を調査した岩下哲典氏によれば、「泰西近年之軍記」とは、岩下氏が「略伝・戦記系ナポレオン伝」と呼ぶ、ナポレオンの生涯をコンパクトにまとめたものである。一方「別冊」とは、幕府天文方で書物奉行の高橋景保が、文政九年(一八二六)に江戸参府のオランダ商館長スチュルレルより聞いたナポレオン情報を筆記した「丙戌異聞」と、高橋が配下の吉雄忠次郎と青地林宗にワートルロー戦記を訳述させた「別埒阿利安戦記」の合本であったという⁽⁵⁰⁾。当時最新のナポレオン情報が、翻訳され次第庄内に送ら

れていたことも驚きだが、注目されるのは「御他見は御無用」の文言である。この本が他見無用であるとわざわざ断っている。これは逆に言えば、三英からの書物や情報、庄内地域で日常的に「他見」されていたことを示しているのではないだろうか。

(5) 仁一郎からの蝦夷地図注文と三英の拒絶

仁一郎からの注文は書物だけでなく地図にも及んでいた。天保六年六月二六日付の三英書簡(四四)をみてみよう。

二白申上候。先達而蝦夷地之地図之義被仰越候。此間折々最上氏二面会仕候間、相談申候所、蝦夷地図並二其説を記候書ハ、先年不残官江上候間、手許ニハ何も無之由申聞候。間宮林蔵と申仁ハ、最上が故同役二而、蝦夷地へハ度々罷下り、最上氏よりハ委敷人二御座候。此人之手許ニハ、種々珍敷図並二書物有之候へ共、此人ハ偏忠之人二而、中々人二貧不申候。(中略)此人當時も蝦夷御用掛二而、尤西洋之説ハ大ニ好ミ候人二御座候へ共、右慰ニ致候ヲ悪ミ、只々公儀之御為メニ致候と申、愚忠之人二御座

候。此人時々蘭学致候人々之宅ニ相尋参申候而、もし地図等私ニ所持致候やを密ニ相改候ゆへ、何方ニ而も右之人参候得は、和蘭書キ物等八愿カウし候事ニ御座候。奇妙ナル人也。〔略〕公儀ニ不忠致候ものをハ、殺さなひで八置かぬと申事、常々口外致候。高橋氏ハ右之牙ニ舐候ニ而相知れ申候。右間宮、年々日本国海辺をカクシ目付ニ成りて相廻り申候。御地杯ニも度々参候由ニ御座候。右之訳ニ而、蝦夷地之真説ノものハ手ニ入兼申候。乍去右之外好事ノ人ハ藏し居候へ共、高橋一件已来、公ニ右等之事見候事ハ、相成不申世之中ニ相成申候。又其内可然もの手ニ入候ハ、写取差上申度候へ共、何を申も閑無之困り罷有候。

仁一郎が蝦夷地図を注文してきた。この時期庄内藩と蝦夷地の政治的な関わりはほとんどない⁶¹⁾。ただし文政一年四月朔日付の書簡(一三)において、三英は最上徳内からの情報として、蝦夷地が稲作を含め農業に有望な地であると報告している⁶²⁾。このような情報を受けて、仁一郎も興味を持つようになったのかもしれない。

しかし三英は、シーボルト事件後の政治情勢を懸念し

これを謝絶している。先日最上徳内に相談したところ、蝦夷地図もそれに関する書物も、先年残らず幕府に提出して手許にないという。徳内の同役であつた間宮林蔵は、蝦夷地に何度も行つたことがあり詳しい人物だから、様々な珍しい図や書物をもっているが、この人は「偏忠」「愚忠」「奇妙ナル人」である。蘭学をしている人の家を訪ねては地図等を私的に所持していかないか密かに探つている。公儀に不忠を致す者は殺さないではおかないと常に口外している人物で、シーボルト事件もこの林蔵が原因であるという噂だ。この林蔵が日本国海辺を「カクシ目付」として廻つており、「御地」にも度々行つているそうだと、仁一郎に注意を喚起する。このような事情で「蝦夷地之真説ノもの」は入手しかねる。ほかに所蔵している好事家もいるが、シーボルト事件以来公に見ることはできない世の中になつてしまった。そのうち然るべきものを入手できれば写し取つて送るつもりだが、なんととっても忙しく困つていると言葉を濁している。

(6) 大塩平八郎の檄文

書物とは異なるが、大塩平八郎の檄文も送られている。

天保八年三月十六日付の書簡である（五九）。書簡の前半では、大塩の乱が平定されたことを「一統大安堵」とし、その経緯を報じている。そして大塩が板行し堂営へ貼り付けた書付（檄文）を写し取り送るとしている。

〔大塩の乱情報・省略〕嘸御地へも此節右之人相書相廻候半と存候。万々一御地杯二落行申間敷ものにも無之と存候間、別而御支配村方杯御用心可被成候。文武二長し候奴二御座候間、召捕二も不容易と存候。先八蹈海いたし候と之風説二御座候。日本之内二居候ハ、一度ハ捕られ可申存候。賊徒等板行二致し、堂宮へ張付置候書付写一通差上申候。穢敷存候へとも、御一覽御慰之ため差上申候。御覽後御火中可被成下候。

この書簡や、その後の天保八年五月一八日付書簡（六〇）における「大坂大悪人大塩父子も遂二滅亡二及誠二万々歳」という書きぶりから、三英の政治意識は低いと評価されてきたが、⁽⁵³⁾ 現在は逆の評価がなされている。幕府の老中や役人たちに対する激越な批判の書である檄文を、全文筆写して送るのは大変危険な行為である。大塩を「賊の張本」とする三英の記述は、役人に露見した

時のための用心であり、危険を冒してまで仁一郎に伝えなかった三英の真意は、おそらく文面とは逆であったことが指摘されている。⁽⁵⁴⁾

二、地域と江戸をつなぐネットワーク

文政一一年六月十日、三英は兄に宛てて次のような書簡を送っている（一四）。

（前略）去年已来学文も大ニ上達仕候。又々蘭文相認め先頃権之介先生被来候節、監定お得候処大ニ称美被致候。当時は権之介先生門人之内ニも忝両輩上達之人有之由。就中岡賢介と申は尤拔群ニ而（中略）忝両年中には此人も出府可被致候由二付、何卒面會致度相談居申候。外には天下中六七人は、よく説候人も有之候へ共、①何れも同志ニ無之候。天文台も明後年ハ交代年ニ御座候間、誰ぞ長崎より別人參可申と存候。左候へは是も又一変可仕存候。②諸侯に而も蘭学お真ニ好候人は忝人も無之候。只医術而已を取用候はまゝ有之候。（中略）何方も一般之風俗にて、門戸お大ニ不仕候へは、門人ニ相成候ものも

無之候。兎角多り元お見申候は、天下一統之悪俗二御座候。③依之此間より見識お相定め申候而、世俗二相構不申、自分一己之学文仕候事二相決申候。名利は何程求め候而も、是迄得候例無之候間、透と相明らめ候而、求めざる事二相決申候。是二而生涯お送候とさへ存候へは、不苦と存候。御地之出生之もの二、野村周徳と申もの、当時青山侯の近医二相成、湊杯の同役二相成り居り申候。如是者二御座候間、何程学文有之候而も、名利之益二は相成不申ものに御座候。是八天下一統皆如是もの二御座候間、彼是相譏候も無益と存候。田舎二参り候へは、少々利益之口も有之候へ共、是又学文之障り二相成候間、延引仕候。④当時蘭学お致候人ノ主意は、何れも名利お重と仕候事二御座候所、私杯之同意二は無之候。第一翻訳お業と致候人は、夫二而金お設け候ため二仕候。又医術お学候人は、夫二而世俗二用られ、望お得候ため二致候事二御座候間、孔子之所謂君子之道二相返(反)候事二御座候。依之私杯之する所は、同く蘭学致候人之目より見候而も、相分り不申候。桂川様二は未だ見合引移不申候。此仁は君子小人之

分ちは、屹度相知候人二御座候。勿論蘭学者の目利も出来候人に御座候間、私杯之胸中は、得二御見取被成下候事二御座候。乍去此人も金銀之助け二は、一向相成不申候。学文之助け二は大ニ相成候人二御座候間、不懈相仕居申候。外二は是そと思ふ人物二も往逢不申候。

まず学間が大いに上達し、通詞吉雄権之助に蘭文を誉められたことを誇らしげに報告している。また権之助門人中「尤拔群」という岡研介の噂を聞いて面会したのものだと書く。ただし他に「よく読候人」がいても①「何れも同志ニ無之」と素気ない。諸侯においても医術のみ採用するだけで②「蘭学お真ニ好候人」は一人もいないと書く。三英は世間の蘭学者たちが「名利」を重視していること批判し、自らは③「自分一己之学文」をすることに決めたと言言する。④金のための翻訳、世俗のための医術、という近頃の蘭学者たちは自分のような考えを理解できないだろう。しかし桂川甫賢という人は蘭学者の目利きもできるので、「君子小人」をきつと判別できるだろう。甫賢の他に「是ぞ」という人には出会えない、と記している。

このように当初は江戸の蘭学社中で孤立していた三英も、岸和田藩医就任や、蛮書和解御用における協同訳述事業、渡辺崋山らとの西洋研究の中で徐々に交際の幅を広げていく。そのような三英の人脈を頼って、庄内の人々は様々な依頼を持ち込むようになる。

(1) 漢学・蘭学塾への入門仲介

既に述べたように、天保八年（一八三七）に仁一郎の次男高彦が三英のもとにやってくる。「唐之学文」に加え「西洋学」を学ぶためだった（書簡三六）。天保五年に仁一郎からその世話を依頼された時、三英は経済的窮迫を理由に一度は拒絶した。しかし熱心な要請に負け、高彦を自身の養子として江戸で修学させることに同意する。以後三英は、高彦の就学先探しに奔走した。高彦が江戸に来る前の天保七年九月七日には、仁一郎に次のような書簡を送っている（五五）。

一、厳彦来春為御登被成候様奉存候。（中略）①聖堂古賀小太郎殿ハ、格別ニ如魂仕候事ニ御座候間、此人へ相頼寄宿為致候事ニ可仕候。扱又②荒川儀一と申仁ハ、一向存知候人も無之候。格別之人共相聞

へ不申候。仙台南山之客に成り居候人の話ニ、右之名前ハ存居候由ニ御座候。聖堂ニ而茂余り知り候人無之候。

①「格別ニ如魂」の聖堂儒者古賀小太郎（侗庵）入門させるつもりであると張り切っている。実は第一回江戸在任期の三英書簡にも「扱当時聖堂にての嚆矢は古賀弘（侗庵）の由、是は親弥介〔精里〕に一倍まさり候才子の由」⁽⁵⁵⁾とあり、当時から侗庵に注目していたことがわかる。侗庵は文化年間のロシア問題に衝撃を受け、海外情報を集集し、大槻玄沢ら蘭学者とも交渉を持っていた。⁽⁵⁶⁾第一回江戸在任期には噂の聞き書きだった侗庵は、この頃三英と「格別ニ如魂」の仲になっていたのである。

ちなみにその後の②では、荒川儀一という人物について一向に知る人もなく、「格別之人」とも聞かないとしている。「仙台南山之客に成り居候人之話」や「聖堂」での噂も書いているから、三英も自らのネットワークを通して調査したのであろう。荒川儀一の詳細は不明だが、このような形で人物照会を依頼されることもあったようだ。

さて、江戸に出た高彦の様子を伝えた天保八年一月

一九日付の仁一郎宛書簡（六三）では、その学問計画を次のように説明している。

扱又高比子茂、至而壯健ニ勤学、兼々申上候通、①先ツ古賀先生と、墨庵と申書家ニ相通、稽古為致候。又聖堂へ從学之書生之内、一二頭角を顕し候者ニ、拙子懇意之者有之候間、右ニ親敷致呉候様、相頼置申候。追々朋友茂相広まり可申哉と存候。外ニ儒家茂多く有之候得共、先ツ当人思入茂可有之と存候間、追々ニ隨身勝手ニ相学候方可然と、此節迄ハ先古賀墨庵之二子のミニ、相通ひ候事ニ仕候。其他私方へ時々出入致候儒家名家之類も不少候間、是ハ入門までニも及不申、存慮次第ニ討論致候事と存候。②十人之師之力よりハ、朋友之切磋第一と奉存候間、追々ハ朋友出候ハ、一ト入学文上達可致理と存候。古賀之会ニ出シ人々も多数有之、自然と其中ニ同志同臭味之輩も有之、懇意ニ相成候ハ、互ニ相助けテ学知を相増候事ニ至可申と存候。夫ゆへ只今までハ、余り強て師数を取候事ハ、相勸不申候。当人存寄ニまかせ居申候。③横文字茂相勸申度所、当時ハ蘭学致候者、何レ茂療治医者ニ相成候而、人を教授

致候者ハ殆ンと無之ニ至候間、長崎より交代之通詞役、是ハ拙子同勤之者ニ而、近く着府ニ相成可申候間、是を相頼隨身為相学可申と存候。乍去年内ハ交代之取調へ等二て、寸暇も無之候ハ、来春より隨身可為仕存候。余リニ打棄置候様可被思召段、奉恐入候間、此處少々申上候。④書家も右申上候墨庵と申候ハ、当時角力ニ取組候ハ、二段目程之者ニ御座候。直ちニ米庵カ弘齋ニ隨身可為致義ニ御座候得共、墨庵ハ私方格別縁辺も有之候間、何か随ひよき訳も可有之哉と存候間、先ツ腰かけニ隨身為致候事ニ御座候。後々ハ米庵なり、弘齋なり、勝手次第第二隨身可然存候。

①古賀同庵・澤村墨庵⁽⁵⁷⁾らへの入門の周旋だけでなく、「聖堂へ從学之書生」に交遊を頼んだ。②「十人之師之力よりハ、朋友之切磋第一」と考えるからである。③蘭学は江戸の蘭方医の塾ではなく、近く着府の天文方詰通詞につかせる予定だ。④書は二流だが縁辺の墨庵につかした。これは「腰かけ」であり、後々は米庵⁽⁵⁸⁾なり弘齋⁽⁵⁹⁾なりに好きなように入門すればよいという⁽⁶⁰⁾。この頃三英が書家ともネットワークを築いていたことがわかる。

ほかにも、天保六年八月二二日付の仁一郎宛書簡（四
五）には、次のような記述がみられる。

難波潤蔵桂川家江入門致度取組之義当春中より塩嶋
周仙と申者三度参り、其後神田橋御留守居中迄、桂
川より被差出候書状、間違候而相届不申由、先頃周
仙罷下候節、桂川より書状、難波江被遣候筈二御座
候。右二付入門料金さへ為差登候得ば、彌以入門申
付候書付、被差出候積二御座候。

「神田橋」は庄内藩の江戸上屋敷を指すから、難波潤
蔵も庄内藩関係者であろう。三英は天保三年まで桂川甫
賢方に寄宿していた。その人脈を頼られてか、庄内藩関
係者の桂川蘭学塾への入門に関与している。

（2）天文方への推挙

次に掲げるのは、天保七年六月二〇日付の仁一郎宛書
簡（五三）の一部である。

石塚六郎兵衛先頃参申候。八月八帰国仕らなければ
ならぬに込（困）り候様申聞候。天文方相成共、自
分物入算勘手伝二ても相成候ハ、越年も出来可申
哉之旨申聞候間、天文方へ私より申入候得共、如何

二可有之候哉。当時天文方二も格別之仁無之、故高
橋作左衛門殿成共被居候ハ、早速出来可申候得共、
只今二而ハ無覺束存候。

石塚六郎兵衛は庄内藩士・和算家で当時江戸修学中で
あった。その六郎兵衛が、当時天文方の蛮書和解御用を
勤めていた三英のもとを訪ねてきた。八月には帰国しな
ければならず困っているという。そこで「自分物入算勘
手伝」でもよいから天文方に推挙してほしいと頼んでき
たのである。だが三英から見れば、当時天文方には「格
別之仁」もなく、故高橋作左衛門のような人がいれば早
速実現するのだろうかと、覺束ない様子である。

結局六郎兵衛は天文方への採用が叶わなかったようで、
庄内に帰国したことが翌月晦日の書簡（五四）に見えて
いる。

ところでこの石塚六郎兵衛は、天保七年（一八三六）
の日記において、江戸での三英の生活とその交流を次の
ように綴っている。⁽⁶¹⁾

一 五月晦日夜小閑三英訪来。蘭学の理論数刻二及
び、近日再訪の約を成て帰ル。三英は庄内の産二し
て当時岡部侯の御医師也。此節天文台の蘭学者二し

て、公儀より御給金を給ル。

一、六月十八日小関三英老を尋二行。岡部内膳正様御屋敷八溜池ニあり。「中略」小関は向長屋ニて随分宜敷長屋也。三英老在宅ニて門弟数人居れり。三ハの会日には、医者群集する也。此所ニて色々窮理の論議し、蘭書杯見せられたり。図解ある書甚面白し。窮理の論問答尽すして昼に成り帰ル。

一、同廿九日小関老来りて色々窮理の論あり。来月八日に天文台へ行事を約す。

三英は同郷の六郎兵衛に対し、「蘭学の理論」「窮理の論」を聞かせたり、天文方へ行くことを約束したりと親切に対応している。また六郎兵衛が六月十八日に三英を訪ねると、その日は「三八の会日」で、三英の長屋に「医者群集」して「窮理の論議」をしていた。六郎兵衛も参加し、図解のある面白い蘭書を見せてもらったり、尽きない「究理之論問答」を楽しんだ様子である。このように、三英と庄内の人々の関わりを示す記事はしばしば見られる。

文政一一年六月一〇日付の書簡（二四）には、「中山良輔父子、此間出府致候由二而、私方二相尋參申候。桂

川様ニも參候由二御座候。私は往違二而、いまた面会不申候。」という記述がある。庄内藩医（蘭方医）の中山良輔父子が出府し、三英と「桂川様」を訪ねてきた。しかし自分は行き違いで面会していないという。

また池田弘斎『病問雜抄』二四には、庄内の加茂組大庄屋富塚斧右衛門が、三英と面談した話が載っている。天保九年に西国を漫遊した帰途江戸に立ち寄り、朝川善庵を訪ねた後三英を訪ねたという。

小関三英にも同人「斧右衛門」面談せり。読書の人々不睡の病多し。これは夜読のために、自然と癖となり、ねられぬもの也。三英も此症にて数年困れるよし。日本にて蘭学の行れしは、五十年斗にもなるべし。後藤梨春の蘭学は八十年位のものなれども、書物斗の鑿穿にて療治はせず。杉田玄白、桂川国瑞などより専ら業にかゝりたりと、三英申聞候よし。

三英は芝山王の近所岡部美濃守藤侯の邸中に居住せり。庄内の小関仁一郎が弟なり。

三英は面会にきた加茂の大庄屋に蘭学の歴史を聞かせている。また弘斎が三英を「庄内の小関仁一郎が弟」とわざわざ断っている点は、同じ地域出身であることを強

調しているようで興味深い。

弘齋の子も江戸で三英に面会している。『弘采録』九四（天保五年頃か）から抜粋する。

小関貞橘なども中ごろは甚窮せしが、十年以前憤を発して東都に出て、いまは岡部美濃守様の御抱となり、小関三栄と号して一家をなせり。今茲四月中旬、愚息東都にて逢ひたるに、衣類等甚立派にて、十年前の貞橘とは雲泥の様子なりと申こせり。専門の蘭学家也。蘭書に於ては甚以通達せる事也。

このような三英の立身、そして面会した人々が目にした「衣類等甚立派」「随分宜敷長屋」といった十年前以前とは「雲泥の様子」の噂は、すぐに地域の人々に伝えられたことであろう。その噂は、さらに新たな来訪者や依頼を生むことになる。そして三英もできる限りこれに誠実に対応していた。

三、江戸からの経済情報

三英の書簡には米相場・全国的な作柄や気象に関する情報が頻繁に記されており、それは仁一郎の職務にも係

る事柄であったことが指摘されている。⁽⁶²⁾

また天保五年一月二二日付三英書簡（三七）によれば、庄内の特産である大山酒を江戸で販売する「発端」について調査するよう、仁一郎から依頼があったようだ。

御地大山酒、御当地へ為相登之発端二付、手便聞合可申旨、委細承知仕候。当年八余日茂無御座候間、来早春二向々相尋可申上候。

続く天保六年一月五日付書簡（三八）には次のようにある。

御地大山村酒、御当地へ為御登、御取組之義、猶又向々之者二聞合、後便委敷可申上候。

大山酒を江戸で販売する取組みについて、江戸で「向々之者」に問合せて回答するとしている。

造酒業で有名な大山は、当時庄内藩の預支配となっていた。⁽⁶³⁾ 大山酒の主な移出先は庄内の酒田・鶴岡などのほか、恒常的には松前・新潟・秋田などであったが、臨時的に江戸・加賀・長崎・仙台にも移出された。仁一郎が職務としてどれほど関わっていたのかは不明だが、当時江戸での移出販売に本格的に乗り出そうとする試みがあり、江戸にいた三英にその手掛かりや見込みを調査する

ように依頼したのであろう。

しかし実際のところ、遠国への大量廻酒は、地場や松前・新潟での市況の不振による残酒の処分を目的とするものだったため、損害を覚悟の上の商法だった。安政三年の江戸移出では、当時たまたま大山に滞在していた国学者鈴木重胤に仲介を依頼したものの、暴風や幕府酒役所への運動失敗による江戸搬入の不許可、江戸の酒問屋仲間の妨害によつて大損害を被っている。⁶⁴⁾

四、医療面での関わり

三英は文政四年に鶴岡で医業に失敗して以降、在地医療には消極的だった。文政一〇年八月二五日、鶴岡帰省後江戸への道中に山形から書き送った書簡(八)には、「当地医療施行之事は、一向相弁不申様子に御座候。乍去一両月茂逗留仕候ハ、少しハ療治も出可申哉ニ存候へ共、わるくすれば本も子も失候事、有之者と奉存候間、右之事ニ相決申候。」とあり、在地医療で「本も子も失」うのではないかという自信のない様子がうかがえる。

江戸での蘭学修行も、郷里での開業、すなわち在村の

蘭方医となることを目的とするものではなかった。前掲の文政十一年六月十日付の三英書簡(一四)では、次のような信念を語っている。

依之此間より見識お相定め申候而、世俗ニ相構不申、自分一己之学文仕候事ニ相決申候。名利は何程求め候而も、是迄得候例無之候間、透と相明らめ候而、求めざる事ニ相決申候。是二而生涯お送候とさへ存候へは、不苦と存候。〔中略〕田舎ニ参り候へは、少々利益之口も有之候へ共、是又学文之障りニ相成候間、延引仕候。

三英は、当時江戸の蘭学者たちが世俗の名利ばかり求めていることを批判していた。自らは世俗に構うことなく、「自分一己之学文」をすることに決めたと宣言している。「田舎」に行けば少々利益の口もあるだろうが、学問の妨げになるので当分その意思もないという。

のち天保三年に岸和田藩医となつた後も、同年七月に藩主が帰国した際には「先少々手隙ニ相成申候間、専勤学可仕と奉存候。ホナハルト伝之翻訳二茂、段々相始可申と奉存候」(書簡二二)と喜び、天保六年(一八三五)三月一〇日には老侯の帰国を控え「相通れ候計策に専ら

相かゝり居申候」(書簡四二)と書いている。御供などの御勤めよりも、自己の学問に心を向けている様子が窺える。

それでも仁一郎からは三英の医学的知識を頼つて様々な相談がなされた。主に親族間の病人に対する診断・処方に限られるが、三英は様々なアドバイスを与えたり、疫病流行情報などを伝えて注意を促している。ただし文面のみのもやり取りであるため、なかなか難しかったようだ。ほかにも三英が庄内での薬草採取を依頼したり、仁一郎が採取のための見本を求めたりしているのも注目される。

さらに医療面における関わりで興味深いのは、次の二通の書簡である。一通目は、天保六年十一月二五日付書簡(四七)である。

大道が遣方発氣劑とか申もの被仰下、奉見候へ共、右ハ一向相知れ不申候。嘸よひ位之名を附候ものと存候。御序之節、右之薬少々、為御登可被成下候。一嘗味仕候へは、早速相分申候。嘸たわいもなき物と存候。

「大道」という人物が処方した「発氣劑」というもの

について、仁一郎から問い合わせがあったらしい。三英は「嘸たわいもなき物」であろうと怪しみながらも、その薬を調べるので少々送つてほしいと書いている。

仁一郎は早速この薬の見本を送つたらしい。その結果は、翌天保七年二月十三日の書簡に同封されている(四八)。

発氣劑とか申者為御登被成、右煉薬諷(風)味仕候處、新テリアカに薄荷油を沢山二加へ候物と被存候。

是ハ嘸大道が細工と被存候。乍去新テリアカに薄荷油加へ候而ハ却而不宜候。

この「発氣劑」は、「新テリアカ」に薄荷油を大量に加えたものだった。おそらく大道の「細工」によるものだろうが、「新テリアカ」に薄荷油を加えてはかえつてよくないという。テリアカは当時盛に用いられた民間薬で、阿片を含む鎮痛解毒薬である⁽⁶⁵⁾。大道はこれに薄荷油を加えることで「発氣劑」という新薬のように宣伝していたわけだが、それはかえつて薬の効果を失わせるものだったのである。

この「大道」は、当時庄内に入り込んでいた大路槐樹という怪しげな医者であったと考えられる。池田玄斎『弘

采録』九四に次のような一節がある。

この貞橘（三英）と山口行齋、結城主計の三人はをしき才器の者ともなりき。行齋主計は帰泉し、貞橘は右のごとし（註・岡部侯に仕官）。役にも立ぬ庸医のみ年々歳々来りつどひ、人を欺き財を貪り、狡猾なる振廻のみ多く聞ゆ。大路槐樹などいへるもの阿片の製法をつたへ、大金を掠とり、夜中出奔せると歎。刃土のかなしさには、かゝる事往々あり嘆すべし。これも、上に有力の医ありて、医学館にても建給ひ、夫々に御世話あらば、人材も逐々出なんとおもふ。

弘齋が聞くと、庄内には毎年「役にも立ぬ庸医」ばかりが来て、「人を欺き財を貪り、狡猾」な振舞いが多いという。大路槐樹などという者は、阿片の製法を伝え、大金を掠めとって夜中出奔したという。弘齋はこのような状況を「刃土のかなしさ」と嘆き、上に有力の医者がいて医学館など建てて世話をすれば、人材も育つであろうと書いている。このように、医学的真偽を見極める人材がいないう「刃土」にあつて、仁一郎が地域のために助けを求めたのは、鶴岡での在地医療に失敗して江戸に

出た三英だったのである。

おわりに

三英の書簡は、当該期の庄内地域における活発な学問・文化活動を伝えるとともに、中央に出た地方蘭学者と地域の交流を示す貴重な史料である。

江戸の三英から庄内の兄への何よりの贈り物は、書物であった。小関家の蔵書や史料が焼失しているため、三英の送った書物や情報が実際にどのように活用されたのか、知ることはできない。しかし、三英書簡における「御他見ハ御無用」の文言からは、逆に書物・情報の「他見」が日常的にあつたことが窺えるのではないか。⁽⁶⁶⁾ 比較的裕福だった組外・大庄屋の仁一郎は、自らも蔵書をもち、江戸の三英に書物を注文し、時には注文を仲介していた。三英が最上徳内に依頼された庄内の出版賛同人集めを託されるなど、地域の文化活動において中心的な役割にあつたことが推測される。また三英が送ったのは書物だけではなく、蝦夷地図を求める兄に危険を伝えるなど、様々な情報を含んでいた。全国的な米関係情報や藩の特産

品の販路情報などは、組外・大庄屋としての仁一郎の職務に有効に活用されたことであろう。

三英の江戸での立身は庄内地域にも知られており、江戸に来た庄内の人々はしばしば三英を訪ねた。江戸の学者について尋ねられたり、漢学塾・蘭学塾入門の仲介、天文方への推挙など、様々な形で江戸のネットワークとの仲介の役割を担っていたことが分る。仁一郎・高彦からの熱心な遊学願や、「自分物入算勘手伝」でよいから天文方に推挙してほしいと頼む石塚六郎兵衛など、庄内地域からの江戸の学問・文化に対する志向が強いことも注目される。

医療面では、仁一郎の依頼で、庄内に紛れ込んだ医者
の怪しげな薬を調べている。江戸で出世した蘭方医・三英による報告は、その後仁一郎を通じて地域に伝わったことであろう。在地医療に失敗して地域を離れた三英は、江戸から別の形で、時に混乱する地域医療を補完する役割を担った。

小関三英は地域医療では根付けず、またその自信もなかった。江戸に出た後は学問を志し、郷里に帰るつもりもなかった。しかし江戸における三英は、決して地域と

疎遠ではなかった。地域の人々は、江戸に出た三英に金銭や物資を送って援助をする一方、江戸の学問・文化・情報・経済への足がかりを求めた。そこには、中央に出た地方出身蘭学者を決して疎遠にさせず、中央との媒介にしようとする、地域における文化・学問への意識の高まりがうかがえる。⁽⁶⁷⁾

ただしこのような中央と地方の関係は、各地域の特性や政治的・社会的条件など、その内実を踏まえながら慎重に検討していく必要がある。地域の実態に即し、地域の目から江戸の蘭学者や学問世界を描き出すことは、今後の課題である。

【注】

- (1) 杉本つとむ編『小関三英伝―幕末一思想家の生涯―』（敬文堂出版部、一九七〇年）、五頁。
- (2) 杉本同右書。
- (3) 山川章太郎「小関三英とその書簡」（東北帝国大学文化会『文化』五卷三、四、六、七、八号、一九三八年）。
- (4) 佐藤昌介『洋学史研究序説』（岩波書店、一九六四年）、一九六頁。

- (5) 岩下哲典『江戸のナポレオン伝説―西洋英雄伝はどう読まれたか―』（中公新書、一九九九年）、岩田高明「小関三英訳『鑄人書』の西洋教育情報―江戸時代における西洋教育情報受容の特質―」（『日本の教育史学』四〇号、一九九七年）など。
- (6) 阿部前掲『小関三英伝』、子孫小関重孝氏より阿部正己氏に宛てた報告書（阿部正己『小関三英傳資料』、鶴岡市郷土資料館所蔵、所蔵番号阿部87）。
- (7) 大川勝三郎「小関三英ノート」（『大泉史苑』一号、一九八〇年）、佐久間昇「小関三英―幕末の開明的思想家―」（『庄内散歩』三七号、一九七七年）など。
- (8) 阿部前掲『小関三英伝』、四〇五頁。ただしこの見解については、藩医中山家の研究により見直しが進んでいる（大瀬欽哉「庄内の蘭医について」（『大泉史苑』二号、一九八一年））。
- (9) 佐久間前掲論文。
- (10) 半谷二郎『小関三英』（旺史社、一九八七年）、八頁。
- (11) 拙稿『洋学論争』（木村茂光監修・歴史科学協議会編『戦後歴史学用語辞典』（東京堂出版、二〇一二年））参照。
- (12) 田崎哲郎『在村の蘭学』（名著出版、一九八五年）。
- (13) 青木歳幸『在村蘭学の研究』（思文閣出版、一九九八年）、青木歳幸・岩淵令治編『国立歴史民俗博物館一六号』
- 地域蘭学の総合的研究』（国立歴史民俗博物館、二〇〇四年）ほか。
- (14) 青木歳幸「地域蘭学の構想と展開」（前掲『国立歴史民俗博物館一六号』地域蘭学の総合的研究）、一頁。
- (15) 塚本学『地方文人』（教育社歴史新書、一九七七年）、川村肇『在村知識人の儒学』（思文閣出版、一九九六年）、田崎前掲『在村の蘭学』、田崎哲郎『地方知識人の形成』（名著出版、一九九〇年）、井上淳「幕末期在村蘭方医の医療と社会活動」（前掲『地域蘭学の総合的研究』）など。
- (16) 青木歳幸「蘭学における中央と地方」（荒野泰典ほか編『日本の対外関係六 近世的世界の成熟』（吉川弘文館、二〇一〇年））、二五一頁。
- (17) 片桐一男『蘭学、その江戸と北陸』（思文閣出版、一九九〇年）、宮地正人編『幕末維新風雲通信―蘭医坪井信良家兄宛書翰集―』（東京大学出版会、一九七八年）など。
- (18) 以下、庄内藩についての記述は、斎藤正一『庄内藩』（吉川弘文館、一九九〇年）、『鶴岡市史』上巻（鶴岡市、一九六二年）、木村礎ほか編『藩史大事典 第一巻 北海道・東北編』（雄山閣、一九八八年）、『鶴岡市史資料篇 庄内史料集一五 庄内史要覧』（鶴岡市、一九八五年）

を参照した。

- (19) 司農とも呼ばれ、農政を総括し、藩の経済を司る。通常二、三人置かれ、三〇〇石以上の家中から選ばれた。
- (20) 『新聞切張史料叢書 第七編 黒谷時敏著述 くだくだ草』(明治三六年一月中旬綴、鶴岡市郷土資料館所蔵、所蔵番号J.08シ)。
- (21) 鶴岡市編纂会『図説 鶴岡のあゆみ』(鶴岡市、二〇〇一年)、六六頁。
- (22) この頃の唯一の史料である三英書簡(『弘采録』二〇所収)には、江戸の儒学者情報のみ記されている。なおこの書簡は山川前掲「小関三英とその書簡」において一番の書簡番号が付されている。
- (23) 儒者井部香山による三英の碑文(小関家所蔵)。ただし碑文には馬場佐十郎にも学ぶとあるがこれは現在否定されている(山川前掲論文、杉本前掲「小関三英伝」)。
- (24) 玄斎の『弘采録』一三九冊、『病問雑抄』七四冊はともに酒田市光丘文庫所蔵。ホームページにて閲覧可能。
- (25) 仙台藩医学学校は養賢堂医学講師渡部道可の建議により文化一四年に創設される。文政五年に学頭となった道可により蘭方科が新設され、桂川甫賢・大槻玄沢の推挙で佐々木中沢が助教に就任した。着任した中沢は女囚解剖を行ない「存真凶腋」を著すが、これに同校漢方医河野杏

庵が抗議文を送るなど当初から摩擦があった。三英書簡によれば文政七年二月には医学校内に天文台を設置する計画も興っていたが、同年八月学頭道可の死により医学校内の漢蘭の勢力が逆転し、蘭方反対派の河野杏庵が副学頭となった(仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編五近世三』(仙台市、二〇〇四年))。

- (26) 高野長英「わすれがたみ」(佐藤昌介ほか校注『日本思想大系五五 渡辺崋山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本左内』(岩波書店、一九七一年)、一八〇頁)。
- (27) 国会図書館所蔵。Prinsen, P. J.: *Geographische oefeningen, of leerboek dere aardrijkskunde, 2de druk, Amsterdam, 1817*, の訳書。
- (28) 原典については野村正雄「ナポレオン戦記を伝えた船載蘭書―箕作阮甫『ヘットスコーンフルボンド野戦之記』の原典及び小関三英愛読の「リンデンの書」―」(『一滴』一四号、二〇〇六年)参照。
- (29) 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編『洋学者稿本集』(天理大学出版部、一九八六年)に影印本所収。同書解題(佐藤昌介)によれば、序文は三英の自筆であり、本文は筆者不明だが訂正箇所は三英の自筆、頭注は崋山筆と考えられている。Volksteles, of Onderwizers Handboek, uitgegeven door de Maatschappij tot nut van t Algemeen.

- Amsterdam, bij Corns. de Vries, hendk. van Munster
en Johannes van der hey, 1807-1808. 〇訳書。
- (30) 山川前掲『小関三英とその書簡』。
- (31) 多治比郁夫『杏雨書屋所蔵書簡集(七) 佐伯理一郎來簡集等・小関三英書簡集』(『杏雨』一二号、二〇〇九年)。
なお本稿で使用する三英書簡は、鶴岡市郷土資料館所蔵のものとは原史料を閲覽し、杏雨書屋所蔵のものは杏雨書屋編『杏雨書屋所蔵書簡集二』(武田科学振興財団、二〇〇九年)所収の影印を使用した。
- (32) 一〇〇石以上の家中から任命。農村の土木工事や治水、御林の管理、農民の裁判を取扱う。定員は四人で組分け。一〇〇石以上の家中から任命。年貢の収納、検見などを取扱う。郷・通に二人ずつ、計一六人。
- (33) 阿部前掲『小関三英傳資料』。
- (34) ともに酒田市光丘文庫所蔵。ホームページにて閲覽可能。
- (35) 両者とも阿部前掲『小関三英伝』による。
- (36) 阿部前掲『小関三英傳資料』。
- (37) 杉本前掲『小関三英伝』、三〇八頁。
- (38) ただし杉本つとむ氏は、中野柳園の著作と言うべきものであることを主張している(杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』(早稲田大学出版部、一九七六年))。
- (39) 山本四郎『藤林普山伝研究』(有坂隆道編『日本洋学史の研究』三(創元社、一九七四年))。
- (40) 森陸彦『徳川幕府の洋学書の翻訳出版規制』(緒方富雄『蘭学と日本文化』(東京大学出版会、一九七一年))。
- (41) 明の袁黄編纂『歴史綱鑑補』か。
- (42) 『通鑑肇要』か。清の姚培謙、張景星の著。天保五年刊の和本あり。
- (43) 川村前掲『在村知識人と儒学』、二五二〜二五三頁。
- (44) 島谷良吉『最上徳内』(吉川弘文館、一九七七年)。
- (45) 島谷同右書、二一三〜二一四頁
- (46) 島谷秀次郎。子行は俳号。
- (47) 『論語彙訓卷之首』はシーボルト日本蒐集書籍にも含まれている(現ライデン大学所蔵)。文政九年に最上徳内と対面した際に贈られたのであろう。シーボルトによる目録には「Rongo ikun makino fazime (略) Edidit Mosamini Tokunai, Jedo 1822」とある(日本學會、日獨文化協會編輯『フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト蒐集並ニヘーグ王立博物館所蔵日本書籍及手稿目録』(郁文堂書店、一九三七年))。一方、徳内が同書の序文を請うて奔走するのは、シーボルト対面後の文政九年六月以降である。
- (48) 杉仁『全唐詩逸』出版・渡清と日本在村文人―在村文化にみる東アジア文化交流―(『学習院女子大学紀要』

六号、二〇〇四年)。

(50) 岩下前掲『江戸のナポレオン伝説』。

(51) 幕府は文化四年、ロシア船が相次いで樺太・エトロフに
来航し乱暴を働いたため、秋田藩・庄内藩に出兵を命じ
ている。庄内藩は文化四年六月三日、物頭加賀山龍治以
下三三五人の部隊を五隻の雇船に分乗させ、糧米六〇〇
俵と用金八〇〇両を積んで酒田港を出帆させた。しかし

ロシア人の南下の兆候が見られなかったため、庄内藩は
八月晦日、守備の任務を解かれ、庄内に帰還した。また
幕末にはロシアの南進が再び活発化したため、幕府は蝦
夷地防備強化のために移民と開拓による住民の増加を計
画。安政六年九月、幕府は一円直轄支配を止め、その一

部を奥羽諸藩(庄内・南部・津軽・仙台・秋田・会津藩)
に与え隣接幕領地の警備を命じた。同時に北蝦夷の警備
にも毎年二藩ずつ当たった(斎藤前掲『庄内藩』)。

(52) ただし、安政期の蝦夷地開拓・水稲栽培の結果は悪く、
畑作の大豆・粟・稗に依存しなければならず、藩の補助
を打ち切ることではできなかった(同右書、一七〇頁)。

(53) 佐藤前掲『洋学史研究序説』、一九六頁など。

(54) 半谷前掲『小関三英』、田中弘之『『蚕社の獄』のすべて』
(吉川弘文館、二〇一一年) など。

(55) 前掲、高橋玄甫宛三英書簡(三英書簡番号二)。

(56) 梅澤秀夫「昌平覺朱子学と洋学」(『思想』七六六号、一
九八八年)、前田勉『近世日本の儒学と兵学』(ベリかん
社、一九九六年)、眞壁仁『徳川後期の学問と政治』(名
古屋大学出版会、二〇〇七年) など。

(57) 市河米庵の門人。墨庵の素性は岩坪充雄氏のご教授を得
た。

(58) 市河米庵。
(59) 卷菱湖。市河米庵・貫名菘翁とともに「幕末の三筆」の
一人。

(60) のち高彦は三英が「文章之達人」と賞賛する安積良斎に
入門した(天保九年二月八日付小関仁一郎宛三英書簡(三
英書簡番号六六))。

(61) 『石塚六郎兵衛日記』(鶴岡市郷土資料館所蔵、所蔵番号
S171-1)。ただし六郎兵衛の日記によれば、天文方仕官
の話を得たが藩務のため自ら断つて帰国したという。

(62) 山川前掲論文、一八九頁。

(63) 大山は酒井氏による預支配となっていたが、天保一三年、
天保の改革に当り尾花沢代官の直轄支配となる。このと
き庄内藩の役銭が廃止されたため御料領民の受けた恩恵
は大きく、天保一五年に庄内藩の強い要請で再び預支配
が決まった際には、酒造業者を中心に大山騒動が起って
いる。元治元年には庄内領となった(斎藤前掲『庄内藩』)。

(64) 同右書、二五四頁。なお斎藤氏は、「重胤のような素人に頼らねばならなかったことは、当時江戸への恒常的販売ルートを持つていなかったことを物語っている」としている。

(65) 山川前掲論文、一四三頁。

(66) 湯川真人「近世後期庄内地域・名主佐藤家の書物ネットワークに関する一考察―「五峯館蔵書」と「書物貸借預記并書物注文代記」を中心に―」（『書物・出版と社会変容』三号、二〇〇七年）にも、庄内地域における活発な読書のネットワークが紹介されている。

(67) 一方で、現在の鶴岡では三英の知名度は低く関心も薄いことは前述の通りである。中央に出た地域出身者へのまなざしのこの変化は、文化をめぐる中央と地方の関係やその歴史を考える上で面白いテーマと思われるが、ここでは立ち入らない。

【付記】本稿は、JSPS科研費26・40084による研究成果の一部である。また本稿の史料調査にあたっては、鶴岡市郷土資料館秋保良氏・今野章氏に様々なご教授をいただいた。ここに記して感謝の意としたい。

【表1 小関三英年譜】

年	西暦	年齢	小関三英	小関仁一郎・小関家
天明3	1783			10月9日、鶴岡に兄生れる(系図)
天明7	1787	1	6月11日鶴岡に生れる。父は知義、通称弥五兵衛(系図)	
文化2	1804	19	庄内藩校致道館設立。三英も出入り。	
文化7	1810	24		3月9日、父弥五兵衛、田川郡清川村にて死去、65歳(系図)
文化11	1814	28	この頃江戸で漢学修業(書簡1)／蘭方医吉田長淑に学ぶ。	
文政4	1821	35	この頃、鶴岡に帰り医業を開くが流行らず(三英伝・『弘斎録』)	
文政5	1822	36	仙台藩医学館に蘭方科創設。佐々木中澤が教官に着任。	
文政6	1823	37	佐々木中澤の再三の勧誘を受け、10月16日仙台藩医学校に着任(書簡2)	
文政7	1824	38	仙台藩医学館において天文台設置の動き(書簡6)／8月21日、医学館総督渡辺道可死去。	母御彌南、病(書簡4)／小関家江戸移住の計画(書簡6)。
文政8	1825	39	3月、仙台藩を去る(書簡7)。以後郷里鶴岡にて母を看病か(書簡欠落のため)	
文政10	1827	41	8月、鶴岡を発して山形・仙台を経て江戸へ上る(書簡8～9)／江戸石町湊長安方に寄寓(書簡16)。	6月9日、母御彌南死去、71歳(系図)
文政11	1828	42	最上徳内・吉雄権之助らと会う／7月、築地桂川甫賢方に寄寓(書簡16)	
文政12	1829	43	『泰西近年之軍記』翻訳(書簡17)	この頃、兄仁一郎に改名か。
天保2	1831	45	初めて華山を訪ねる(華山『全樂堂日録』)	この頃江戸詰か。藩務の傍ら槍術を学ぶ※
天保3	1832	46	1月15日、岸和田藩藩医(給人格、七人扶持金五両、さらに御手許金五両)に仕官、江戸赤坂溜池山王隣の藩侯長屋に移る(書簡21)／『ホナハルト伝』翻訳始める(書簡22)／『西医原病略』刊行・『泰西内科集成』翻訳。	
天保4	1833	47	この頃天文台から就任交渉があるが、俸給額が折り合わず(書簡26～27)	
天保5	1834	48	2月、俸給半減(銀5枚)で天文台就任の交渉あるが断る(書簡28)／4月、岡部侯日光代参につき御供(書簡32)	仁一郎の子千代松・高比子を来春江戸へ遊学させたいと三英に交渉(書簡35・36)
天保6	1835	49	4月7日、天文方御役所阿蘭陀書籍和解御用となる、銀十枚。『厚生新編』六〇～七〇巻翻訳／この頃三英を三英と改名	
天保7	1836	50	9月、御近習医師から御匙格に昇任(書簡55)／9月、『新撰地誌』を著す	仁一郎次男巖比子上京が決まる(書簡49など)／ご精勤に付御紋付御上下拝領(書簡51)／7月、仁一郎榊引本郷村大庄屋となる(家系図)25俵(庄内大庄屋傳)。
天保8	1837	51	『那波列翁伝』翻訳／6月、兄仁一郎の次男巖比子上府。養子高彦となる／この頃結婚か(11月頃より書簡に妻の記事)	
天保10	1839	53	5月14日渡辺華山入獄。5月17日、三英自殺。藩ではしばらくこれを秘し23日自刃と報告。5月18日高野長英自首。	
弘化4	1847			11月、仁一郎、中川通荒川組大庄屋となる(系図)三舛に移住(三英伝)
嘉永2	1849			12月、仁一郎、組外を命ぜられ鶴岡に移る(系図)／御帳付代(三英伝)／30俵、榊引通本郷組徒格か(嘉永2年小分限帳)
嘉永5	1850			御帳付代引上(色々聞書日記)
嘉永6	1853			1月、吟味方(色々聞書日記)／斎村字舞屋に一時家居、さらに最上町片桐七太夫の家宅を買って移る(三英伝)
元治1	1864			7月8日、仁一郎没、82歳(系図)

※小関重孝氏より阿部正己氏に宛てられた「調査書」

系図＝阿部正己『小関家系図』／三英伝＝阿部正己『小関三英伝』／庄内大庄屋伝(鶴岡市郷土資料館所蔵、著者不明、大正9年筆写本)／色々聞書日記(鶴岡市郷土資料館所蔵、嘉永4年より6年までの記録。表紙に「斎藤」とあり)

【表2 小関三英書簡】

番号	年	月日	宛名	概要	所蔵
1		5月3日	高橋玄甫	第一次江戸在住期／東都の学者は皆末学。江戸の漢学者・文人情報。	弘采録20
2	文政6	10月19日	小関友之助	仙台・医学校情報。米苗・米作情報。	鶴岡
3	文政6	10月25日	小関友之助	仙台情報(風俗・農政・米値段など)。	杏雨
4	文政7	1月21日	羽州鶴岡中高畑 小関友之助	当年は仙台滞留のつもりだが、母の病気で自分が必要となれば立帰る予定。	鶴岡
5	文政7	2月3日	羽州鶴岡中高畑 小関友之助	返信がないため4日同内容。	鶴岡
6	文政7	2月23日	小関友之助	「翻訳」に取掛かり、当年中出版の予定／兄一家江戸移住の計画・帰国命令に困惑／仙台医学校に天文台を設けて蘭学を興す計画(まだ「医学校役掛」も知らぬ「甚密々」のこと)／仙台・江戸での麻疹・痘瘡流行→御地へ子供が麻疹にたなび、松山空権が次井自慶(鶴岡の医者)に頼むように。	鶴岡
7	文政8	1月5日	小関友之助	江戸出立決定。	鶴岡
8	文政10	8月25日	小関友之助	庄内帰省後仙台経由で江戸を目指す途中の山形からの書簡。山形での開業には消極的。	鶴岡
9	文政10	8月25日	小関友之助	追伸。山形の様子。	杏雨
10	文政11	1月5日	小関友之助	長崎より吉雄権之助・馬場為八郎出府／仙台藩主襲封・進藤・加藤(庄内出身医師か)の評判。	杏雨
11	文政11	3月24日	小関友之助	疫病流行時の予防法／サウ草の採集・送付依頼／桂川邸へ引移る予定。	鶴岡
12	文政11	3月24日	小関友之助	追伸。最上徳内から庄内での出版列各人募集の周旋を頼まれ、兄に依頼。	杏雨
13	文政11	4月1日	小関友之助	天候不順で作合懸念／吉雄権之介出府・面会／サウ草再度依頼／最上徳内に聞いた蝦夷地の農業への期待。	鶴岡
14	文政11	6月10日	小関友之助	足痛／世間の蘭学・蘭学者情報と批判・「自分一己之学文」のため田舎には帰りがたい／同郷の医者中山良輔父子出府して私方に来たが会えず・桂川にも訪ねた由／抱瘡御地流行の由、テリテカの濫用に注意。	鶴岡
15	文政11	6月21日	小関友之助	薬酒粉の礼／足痛快方へ／天気	鶴岡
16	文政11	7月13日	小関友之助	桂川邸へ引移る／蘭学関係情報(シーボルト・岡研介)／盛暑のため近国の作合はよいだろう。	杏雨
17	文政12	3月1日	小関仁一郎	仁一郎長男千代松原一の斑点の処方／シーボルト事件情報／泰西近年之筆記の和訳を当月末までに送る。別冊一本(高橋景休の『丙戌異聞』別掲阿利安載記)を送るが他見無用／米値段／御国製味噌」送付依頼	鶴岡
18	文政12	1月14日	紙漣町横丁 小関 仁一郎	御地より能が贈らねば後書状届かず／「菅原吉右衛門と申ス御才領へ詠候品と手習筆を送る。米値段下落と諸式高直で江戸不景気	鶴岡
19		12月28日	紙漣町 小関仁一郎	仁一郎長女お初に結婚祝いを贈りたいが此節は送れず／兄より能を贈られる。／「暴吉」も近々送付とのこと、有難いが「販賣料」も払えず。	鶴岡
20		10月21日	桂川甫賢	ある人の依頼により頼んで「御園」の催促。	鶴岡
21	天保3	2月2日	小関仁一郎	岡部美濃守に召出され、岸和田藩御医師を仰せ付けられる。七人扶持金五両。岡部侯の「格別之御厚意・初めより給人格(当藩三而も至て重き事)」	鶴岡
22	天保3	7月24日	小関仁一郎	お初へ祝い金二両送る／岡部侯(備前「ホナノハルト在」)翻訳始める。清川麩四尺、「なめすき菰漣」二升注文。代金運賃は遅れる。／「当藩之風」に慣れてきた。天候・作合情報(米澤の人)より	鶴岡

番号	年	月日	宛名	概要	所蔵
23	天保3	10月2日	小関仁一郎	清川鮎・なめすき再度依頼。雑費金一両は11月中支払う。送り先は「葉種屋神崎屋源蔵」方へ／西丸下大名屋敷火事／天候／近国の作合良／「熾吉」採取、送付の注文	杏雨
24	天保3	10月28日	小関仁一郎	清川鮎・なめすき再依頼。雑費一両中二枚は既に支払い残りは11月中送付／琉球人来朝。	杏雨
25	天保4	1月19日	千住小塚原 五十嵐其徳	高野長英「医師原叔要」初編刊行・長英の二稿は既に既字社中に頒布／長英翻訳校正の「シヤルト」入手の件相談	大槻茂雄
26	天保4	3月21日	小関仁一郎	天文方山路彌左衛門御手附の蘭書翻訳官として、岡部侯より自分を御借上にならうという「御内意」→「重豊」仕合富貴之至／天氣／仁一郎から「静好堂朱軸手本」送付、翻譯を依頼される	鶴岡
27	天保4	5月7日	小関仁一郎	「天文方御手附御借上」甲申正（「俊人」の仕業か）／大垣城下大地震／天候／「静好堂筆」送付延引	鶴岡
28	天保5	2月29日	小関仁一郎	天文台取止は「御候約」が理由。手当金半減で再度内達があったが断る（遠路で雨天時は駕籠のため動まらず）	鶴岡
29	天保4	11月28日	小関仁一郎	鮎式尺・千せんまい百目の札／手習墨三丁送る／岡部美濃守隠居・内膳正襲封／「御地」創館・地震・越後・米澤・南宮・江戸の創館とその対応、米価情報。	杏雨
30	天保5	1月4日	羽州鶴岡 小関仁一郎	「御地」凶作・大地震・津波／奥州・江戸の気候・作合情報。上方は作合・米師がよいため、江戸在勤の上方諸侯の家人が散つていくことに憤慨	鶴岡
31	天保5	3月12日	小関仁一郎	江戸の火事騒／凶作による「御地」の困難を察する	鶴岡
32	天保5	4月12日	小関仁一郎	岡部内膳正日光代参の御供で「大根雑」／仁一郎妻実家の堀元郎病死につき、何か贈りたいが「根雑」のため出来ず／仁一郎より調昌丸という菓を要求されたが、近頃は使用しないため「マクネット」を送る／江戸・奥州で風邪流行／「志奈布」を頼んだが駄賃等莫大にかかることの事なので見合わせる	佐藤古夢
33	天保5	6月15日	小関仁一郎	畠中見舞／天候から豊作予想（米澤・仙台も）／米価情報	鶴岡
34	天保5	8月21日	石井助三郎（住内藩邸書信往復役人）	金式歩送付（兄へ注文した鮎の代金）	鶴岡
35	天保5	9月10日	小関仁一郎	鮎注文（金は石井に託した）／成瀬氏上りの注文書・承知／「筆之義」承知・近便で送付／仁一郎の子千代松・高比子を来春江戸へ遊学させたいとの希望を拒絶（経済的窮迫・まずは「御地」で学問すべし）	杏雨
36	天保5	9月10日	小関仁一郎	二白。前便の拒絶の理由（経済的窮迫・漢学は江戸でなくとも「田舎」でもできる。「西洋学致度旨」にこいつい、学問無用論）	鶴岡
37	天保5	12月22日	小関仁一郎	鮎三尺・菟滑巻升送付の札／遊学の件は後日返事する／「御地」大山浦江戶売り込みの件、兄より問合せ→来早春に返事／一昨日浅草蔵前火事	鶴岡
38	天保6	1月5日	小関仁一郎	昨年の鮎三尺・田妻滑巻升の札／成瀬氏注文書物／「御地」大山浦江戶移出の件、後便で報告	鶴岡
39	天保6	1月2日	小関仁一郎	年賀状。前便に同封	鶴岡
40	不明		小関仁一郎	年賀状。39とほぼ同内容	鶴岡
41	天保6	2月29日	小関仁一郎	「御地」・米澤は旧冬大雪→豊年の儼／諸式高直／江戸で「麻珍」のごとき熟病流行	鶴岡
42	天保6	3月10日	小関仁一郎	詩経註疏・左伝註疏注文への返答／仁一郎長女お初の手の出来物への処方／注文を受けたかんざし、元結類）当月未頃に送る／岡部を侯爵国の供を逃れたい	鶴岡
43	天保6	6月26日	小関仁一郎	気候から当年随分豊作と予想／25日強地震	杏雨

番号	年	月日	宛名	概要	所蔵
44	天保6	6月26日	小関仁一郎	二日。仁一郎からの郷夷地図注文への回答と謝絶(最上徳内へ相談・間宮林蔵の噂・世界情勢の書物や地図などを翻出出版できない時勢)	杏雨
45	天保6	8月22日	小関仁一郎	難波間蔵(庄内藩関係者か)桂川家入門の手續/仁一郎長女お初の手の贈物/手習筆を送りたいが岡部彦家に病人あり守服なし	鶴岡
46	天保6	9月14日	小関仁一郎	毎年注文の鞋、今年も三尺注文(廻所なき方からの頼み)・金式歩中巻歩送付/お初の手の出來物(まは回内巻)/米価直々高直。買占める者ありと推察。	杏雨
47	天保6	11月25日	小関仁一郎	鞋三尺・小鯛、清草の札/庄内の医者「大道」処方の発気剤について兄より問合せ/仙石騷動/諸式高直と飢饉の情報	鶴岡
48			小関仁一郎	49)に同封。「大道」処方発気剤の調査結果。「大道が細工」	鶴岡
49	天保7	2月13日	小関仁一郎	蔵比子 上京・遊学につき支度金を出せず。経済的窮迫。	鶴岡
50	天保7	2月13日	小関仁一郎	二白。支度金の出せない。経済的窮迫事情。	鶴岡
51	天保7	5月24日	小関仁一郎	干鰯送付の札/仁一郎御精勵に付御文付御上下拝領を祝う/蔵比子秋上京を承知。仕度はずきず/ハシリテナについて、仁一郎が野生を探すために押し葉を求める。手元にないたため葉を送る/海苔送付の札/寒冷の気候(仙台之人)にも聞く)→「当年度作各極て不立と存候」	鶴岡
52	天保7	6月12日	小関仁一郎	暑中見舞/干鰯・海苔送付の札/ハシリテナ送る/寒冷の気候から上方も含めた大飢饉を予想	杏雨
53	天保7	6月20日	小関仁一郎	寒冷の気候から大飢饉予想(江戸・上戸・奥州の情報。九州の気候は未承)/庄内藩の和算家石塚六郎兵衛に頼まれ天文台に推挙/松平固防守が朝鮮征伐陽崎で密貿易/岡部彦鼎国前につき多忙。	鶴岡
54	天保7	7月晦日	榑引本郷 小関仁一郎	石塚六郎兵衛帰国/仁一郎の「御役宅」(榑引本郷村大庄屋)引移を祝う。ご祝儀は「此節色々混雑のため来月中旬に送る/江戸・上方・九州は前代未聞の冷気・不作だが、「御地」へ当年格別之不作ニ差至間敷由」と安心	鶴岡
55	天保7	9月7日	榑引本郷 小関仁一郎	役宅引移を祝う/全国の飢饉・米値段情報/蔵彦来春上府。慈意の古賀侗庵に頼む。仁一郎から問ひ合せの「荒川儀一則」については知らず/康熙字典・三国志唐本の件承知/將軍拜領の木盆を入手したので茶少々を送る(仁一郎大庄屋就任の祝いか) /三英、御近習医師から御馳格に算格	鶴岡
56	天保7	10月14日	石井助三郎	三英病氣に際し見舞いの札(既にお返し)	杏雨
57	天保7	11月28日	小関仁一郎	三英病氣に際し(既に全快)兄より金一面の送付に札。返納も恐縮なので書簡買って送る/「なめ」送付の札/来春蔵彦上府を希望/全快したので見舞のため民之輔蔵彦上府は不要/飢饉の惨状	鶴岡
58	天保8	1月2日	小関仁一郎・民之輔・蔵彦	年賀状。	鶴岡
59	天保8	3月16日	小関仁一郎	大塩平八郎の乱の情報。「御地」落行に注意。「御意のため」撒文を送付するか説後焼き捨てるように/不作・高直で諸民困窮/当年も野菜は出来ないうらから御地で蔵彦・蔵など採集・干して送ってほしい/蔵彦上府道中に注意	杏雨
60	天保8	5月18日	榑引本郷 小関仁一郎	干鰯送付の札/寒冷の気候(寒暖計にて計測)(九州情報も)/江戸近在製作良好・胡瓜茄子不作/大妻など天候次第で諸式直段狂い、大商人が利益を得て貧民が餓死/大塩父子滅亡/「米澤之人より御地の冷気を聞き豊年を願う/蔵彦上府中	杏雨

番号	年	月日	宛名	概要	所蔵
61	天保8	7月16日	小関仁一郎・民之輔	江戸・御地とも天候直り中位の作になりそうで「大安心」／高比子を古賀侗庵方へ入門させた／注文の康熙字典式面で購入。代金は高比子貯金から工面／一八史略・元明史略を送るつもりで用意したが、高比子の話では御地に綱鑑補があるそうなので見合わせる。歴史物で珍しいものを送りたい／嶽苔(依蘭窓)問合せに回答／ふしのご・さんざう、元結送る	鶴岡
62	天保8	10月12日	榎引本郷村 小関仁一郎・民之輔	略史物綱鑑要を送付／大皿死骸燻／三都静謐だが米価近々引上げを懸念	鶴岡
63	天保8	11月19日	榎引本郷 小関仁一郎	高比子常羽織・足袋送付の札／雛式尺・小鯛五尾・清草一曲・菓二升・枳粉一箱送付の札／高比子修学方法／「家内」より挨拶／茶二斤・蜜柑少々を送る／当冬は暖気のため妻作を懸念	鶴岡
64	?	10月12日	民之輔	二白(62か)／仁一郎の娘於初より三葉「家内」への贈り物の札	鶴岡
65	?	11月24日	榎引本郷村 小関仁一郎・民之輔	寒中見舞	鶴岡
66	(天保9か)	2月8日	仁一郎	御製鮎送付の札／今冬中暖気のためか雪が一向に降らず正月以降当月まで度々雪→妻作を懸念／高比子健康・勤学。「文章之達人」安権良斎に入門させる予定	鶴岡
67	天保9	11月10日	榎引本郷村 小関仁一郎	高比子健康勤学／寒気のため来年豊作と予想／仙台南郡凶作・諸国も米値上り、上方・江戸近郊・越後などは格別の凶作もないが「奸商奸吏」のために高値で困る／都下静謐だが食多く来春懸念／諸式高直／勘定奉行失部定謙退役後「奸商奸吏」が時を得る	鶴岡
68	天保10	正月7日	小関仁一郎	雛式尺・清草・黒大豆送付の札／喜撰茶一斤を送る／暖気で妻作によくない(「田舎之者之咄」)／「唐本類之義」承知	杏雨